

第170回山口西田読書会（2018年4月14日）

第169回（2018年4月7日）のプロトコル 担当 田中克典
テキスト 西田幾多郎『働くものから見るものへ』

1. 前回の復習～唐露さんのプロトコルをふまえ

25ページ～27ページ再読

唐露さんの哲学的問い 「包む」と「含む」の違いをどうとらえるか？

「包む」には、作用、力を感じる（唐露さん）

該当箇所を検討した。引き続き考えていくこととなった。

2. 読書会の要約 働くものから見るものへ 前編 直接に與へられるもの

29ページ11行目～30ページ10行目までを輪読

二 **第2段落**

第1段落での「直観」に関する考察を受けて、直観と想起との関係を検討する

直観→記憶→想起→意識

思惟による直接の経験内容の構成→上記の作用を間に挟む

アウグスティヌス

我々は我々を創造した物を求めて⇒記憶の宮殿

⇒我々が知覚したすべてのもののみならず、考えるすべての物が蓄えられる

⇒それは広く測り知れない奥院

（「告白」X. 8）

もし、意識がその時々のものであれば、過去の意識と現在の意識を結合するものは何か？

超時間的意識→これによって過去の意識を記憶から想起→過去の意識と現在の意識を比較→過去を直観する意識が生じ→未来を見る意識を生じさせる。

我々の意識→いつも一つの意識 二つの意識が同時に存在するのではない

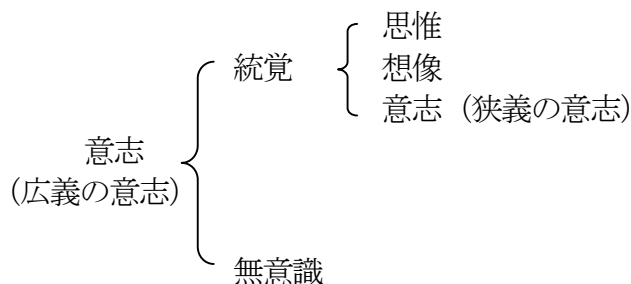
我々が過去を想起するとき→感覚は、感覚の意味を失い⇒想起の構成的要素となる

（我々が）思惟の立場に進めば→種々の記憶表象（想起したもの）は之（思惟）を構成する材料となる

或る一つの意識が明らかになれば⇒他の意識は（思惟を構成する材料となるので）その独立性は失われる⇒このことが『我々の意識は、いつも一つの意識 二つの意識が同時に存在するのではない』ということか？

感覚が意識の基となるのではない

具体的意識→衝動の形に於いて成立する→広義の意志でなければならぬ



(参照)

善の研究 第3編 第一章

第6段落

意志と聯想及び融合との関係

聯想→觀念結合の方向を定むるものは外界にあつて、内界にはない
明らかに意識上に現れない、ということ

融合→觀念の結合が更に無意識、結合作用すら意識しない
意識現象はすべて意志と同一の形式を備えている

→すべてある意味における意志である

これら統一作用（聯想、融合）の根本となる統一力→自己

→意志は最も明らかに自己を発表したもの

我々は、意志活動において最も明らかに自己を意識する

第3段落（一部）

意志は如何にして起こるか

① 我々の身体→自己の生命を保持発展するため自ずから適當なる運動を
為すように作られている

意識→この運動に沿うて發生⇒始めは單純な苦樂の情

② 外界に対する觀念が次第に明瞭になり且つ聯想作用の活発化
結果の觀念を想起⇒その手段となるべき運動の觀念を伴い⇒運動に移
る⇒意志なるものが發生

③ 意志の生起の要素⇒運動の方向、聯想の方向を定める肉体的、精神的
素因⇒意識の上で衝動的な感情として出現

衝動的な感情⇒意志の力とも稱すべきもの⇒動機と命名

経験によって得、聯想によって惹起⇒結果の觀念＝目的（目的觀念）

が動機に伴う⇒意志の形が成立⇒欲求＝意志の初位

欲求が一つ⇒運動の觀念⇒動作

欲求が二つ以上⇒欲求の競争⇒最有力、意識の主位⇒動作⇒決意

意識は内面的統一によって成立する、といえる

対象を内に含む（意識を構成する材料とする）、といえる

我々の意識→（衝動とか意志という形に於いて）→空間、時間を超越している

意識が所謂『時』の中にあるのではない→所謂『時』は意識の中にある

意識の能動的統一、『真の時』

→意識の中において対象化することはできない（意識できないということ？）

統一の自覚（意識ではなく）→我々の意志

我々の衝動的意識→超時間的意識が含まれている

物力の意識→之（衝動的意識）によって成立する

物力→『所謂時』に対して不変であり、永久（超時間的）

我々は、衝動において物力に直接するだけでなく、之（物力）を内に包んでい
る

物が永遠に現在⇒衝動も永遠に現在

(参照)

*時間について

善の研究 第2編 第6章 第3段落

意識現象→時々刻々移りゆくもの 同一の意識が再び起こることはない

「昨日の意識」と「今日の意識」の関係をどう考えるか？

両者が異なったものという考え方

→直接経験の立脚地からの考え方ではない

時間という者を仮定し、意識現象はその(時間)上に顕れる者と推論したもの

時間の性質上、一たび過ぎ去った意識現象は再び還ることはない

∴) 時間は、唯一一つの方向を有するのみ(後戻りしない)

(この考え方によれば) 全く同一の内容を有する意識であっても、時間の形式上

同一とはいえない(なぜなら常に時間は動いているから)()内は田中メモ。

↓これに対する西田説(直接経験の本に立ち還った考え方)

【時間の定義】我々の経験の内容を整頓する形式にすぎない

意識の統一作用は、「時間」の支配を受けるのではない

意識の統一作用が、「時間」を成立させる

意識の根柢には、時間の外に超越する「不変的或者」がある

(註) 直接経験の立場からの観方

同一内容の意識=同一の意識

「真理」→「何人」が、「何時代」に考えても「同一」

「昨日の意識」と「今日の意識」

→「同一の体系」に属し、「同一の内容」を有する

→両者は、直ちに「結合」され、「一意識」となる

「個人の一生」→このような一体系をなせる「意識」の「発展」

精神の根柢には、常に、「不変的或者」がある

「不変的或者」→日々、その発展を大きくする

「時間」の「経過」→この発展に伴う統一的「中心点」の変動

「中心点」がいつでも「今」

【哲学的問い】

『今』と『現在』の関係はどう考えたらいいのか？